

# ローマオリンピック バスケットボール日本代表チームの 対戦記録より探る

吉井 四郎

日本スポーツ界は、東京オリンピック成否の鍵は、その選手強化にありと考え、最近とみに活況を呈して来た。

バスケットボール協会においても、その例外ではない。

選手の強化方針には種々の方法が考えられるが、可能にして最も確実と思われるのは、“二度と同じ失敗を繰り返さない”という事かと思う。

この事は、必ずしも直ちに失敗絶滅と勝利の獲得を意味するものではない。意味するものは、“少くとも、二度と同じ負け方をしない”という事であり、その精神は、過去の体験を真剣に探究し、その上に工夫を重ねて追求し、少くともその事には成功するならば、何時の日か必ず成功する日があるかという事である。

私達は、勝つ事を望み、又是が非でも勝つんだという信念をもって努力する。しかし、現在私達が出来る事と言えば、過去の体験をあらゆる角度から検討し、能力の限りの工夫を重ね、それを倦む事なく追求するという事以外にはなく、成功は、その結果得られるものであるという事を確認することである。

この意味において、ローマオリンピック日本代表チームの森沢監督及び前田コーチによる、度々の報告会及び適切なる報告書は、選手強化の第一歩として請に意義あるものであったと思う。

報告会、又は報告書における彼等の感想は、今後日本チームの向うべき所を明瞭に示してくれたという意味において、貴重なものであったが、しかし反面静かに考えると、彼等の感想は、ローマに於けるゲームの感銘が余りにも強烈であったが故に、強く印象づけられた事の

(第1表)

ゲーム	対戦 チーム	得点	反則	野 投			計
				ゴール下	中	長	
予選第一戦	日本	66	32	6/9 66.6%	14/36 38.8%	6/18 33.3%	26/63 41.2%
	対 ハンガリー	93	30	30/40 61.2%	7/13 53.8%	1/4 25.0%	38/66 57.5%
予選第二戦	日本	66	32	9/14 64.2%	13/45 28.8%	7/17 41.1%	29/76 38.1%
	対 アメリカ	125	23	50/58 86.2%	3/15 20.0%	1/1 100%	54/74 72.9%
予選第三戦	日本	92	46	19/36 52.7%	8/29 27.5%	8/28 28.5%	35/93 37.6%
	対 イタリー	100	29	30/46 65.2%	4/16 25.0%	2/5 40.0%	36/67 53.7%
順位第一決定	日本	63	41	9/27 33.3%	6/31 19.3%	5/23 21.7%	20/81 24.6%
	対 フランス	101	30	31/48 64.5%	8/18 44.4%	2/4 50.0%	41/70 58.5%
順位第二決定	日本	57	19	10/28 35.7%	5/34 14.7%	5/14 35.7%	20/76 26.3%
	対 メキシコ	76	26	22/36 61.1%	9/30 30.0%	4/8 50.0%	35/74 47.2%
順位第三決定	日本	64	35	9/24 37.5%	11/33 33.3%	3/12 25.0%	23/69 33.3%
	対 スペイン	66	29	15/32 46.8%	4/15 26.6%	4/8 50.0%	23/55 41.8%
順位第四決定	日本	73	29	15/27 55.5%	16/41 39.0%	4/9 44.4%	35/77 45.4%
	対 ペルトリコ	93	11	34/59 57.6%	3/9 33.3%	1/1 100%	38/69 55.0%
計	日本	481	234	77/165 46.6%	73/249 29.3%	38/121 31.4%	188/535 35.1%
	対 7ヶ国	654	178	212/328 64.6%	38/116 32.7%	15/31 48.3%	265/475 55.7%

(註1) このスニアーには計算の合わない所若干あるが(例へば総得点654に對し、野投及自由投

(註2) %は私の計算である(以下同じ)

自由投	リバンド		ミスプレー		平均身長	
	オフエンス	デフェンス	パッパ	ドバイオレ スーション	平均身長	身長差
14/27 51.8%	8 27.5%	15 57.6%	9	11	179.5 cm	-110 cm
17/22 77.2%	11 42.4%	21 72.5%	9	7	190.5 cm	
8/16 50.0%	8 20.5%	7 77.7%	4	12	179.5 cm	
17/24 70.8%	2 22.3%	31 79.5%	9	17	196.0 cm	
22/37 59.4%	10 23.2%	14 60.8%	6	6	179.5 cm	-12.4 cm
28/41 68.2%	9 39.2%	33 76.8%	17	10	191.9 cm	
23/30 96.6%	10 22.2%	16 53.3%	8	6	179.5 cm	
21/33 63.6%	14 46.7%	35 77.8%	14	10	190.9 cm	
17/23 73.8%	11 23.9%	17 53.3%	7	9	179.5 cm	- 8.8 cm
8/14 57.1%	16 48.5%	35 76.1%	10	17	188.3 cm	
18/22 81.8%	15 34.8%	23 74.1%	0	19	179.5 cm	
20/28 71.4%	8 25.9%	23 65.2%	13	12	183.0 cm	
3/11 27.2%	6 16.2%	16 64.0%	5	9	179.5 cm	- 8.9 cm
17/28 60.7%	9 36.0%	31 83.8%	15	11	188.4 cm	
105/166 63.2%	69 24.5%	113 62.4%	37	72	179.5 cm	
128/190 67.3%	69 37.7%	209 75.2%	87	84	189.9 cm	
				171		-10.4 cm

得点を合計すると658になるその原因が不明であるのでそのまま使用する事にした。

みの報告であって、実際のゲームそのままのものではなかったのではないかという疑問が残る。何故ならば、実際のゲームには彼等が特に感ずる事のなかったような場面も当然相当あった筈だし、又一般に報告では、感銘させられたものを伝えんが為に誇張され勝ちなものであるからである。

特に成功した事、或は非常に失敗した事等の、強く感銘させられた事は、それ等に対しての工夫対策が、最も直接的な選手強化の対策になるが故に、何よりも重大視せねばならぬが、ゲームそのままのすがたを正しく把握するという事も、正しい対策を考える上には、欠く事の出来ないものと考えられるのである。

実際のゲームは、フィルムを通して極く僅かに、後は、報告会や、代表選手の何人かの話を聞いたに過ぎない私が、実際のゲームそのままの正しい見方、感じ方が出来るとは思わない。しかし、幸いにも、前田コーチの報告書には、ゲームの成績がそのまま数字になって表わされた。対戦チームとのスコアが記載されている。私はこれらのスコアを通して、知り得る限りのゲームの実相を把握する事に努力して見た。

数字は正直であるという点に、スコア検討の意義がある反面、スコアし得ないプレーイがあるという点に、その限界があるものであるが、況してや、限られたスコアから、そして、これらのスコアを日本に於けるゲームのスコアから類推するという方法では得られた結果に若干の疑問がある事は否定出来ない。しかしそれでもお、この事によって相当有効な幾つかのヒントを得ることが出来たのである。

前田コーチの報告書には各試合毎に、個人とチームのスコアが記載されているが、個人別のスコアについては、その試合出場時間が明らかにされていないし、日本チームの今後のあり方を検討する場合には、間接的な問題であるので、原則的には省略する事にする。

各試合別及び7試合を合計したスコアは「第1表」のようであった。

### (1) 資料の作製

ゲームのスコアからその勝敗因を検討する場合、勝敗因とは相手チームとの相対関係における長所短所であるが故に個々のゲームについて検討しなければ、殆んど意味のないものとなるのが普通である。しかしこのゲームに限っては、すべての種類のスコアが殆んど同じ傾向を持っているので、「第2表」参照これ等ゲームの勝敗因は、その量において、試合毎に若干の相違があったとしても、本質的には変りがなかったと考えられるのである。

それ故に私は、それらの平均スコアを求め、「第3表」参照それを検討することによって、日本チームのオリンピックゲームズにおける本質的な勝敗因が探究出来ると考えた。

そして私はこのようにして探究された勝敗因が、国際試合における日本チームの本質的な長所、短所を示すものであると考えたのである。(個々のゲームはこれと同じ考え方でそのゲームの勝敗因を探究することが出来る。

第2表 各種スコアの相対関係数

①得点	日本<外国			
②反則	" > "	例外	日本<メキシコ	
③野投成功率	" < "	"	なし	
④自由投成功率	" ≐ "	"	なし	
⑤R.B	" < "	例外	日本>スペイン	
⑥M.P	" < "	"	日本>ハンガリー	
⑦身長	" < "	"	なし	

(註1) 時々出て来る熟語は、以下次のような略符号を使用する。

「R. B」=Rebound Ball 「O. R.」=Offensive Rebound Ball 「D. R.」  
=Defensive Rebound Ball, 「M. P.」=Miss Play, 「V又はViol」=Violation  
「H. B.」=Held Ball 「J. B.」=Jump Ball, 「F. S.」=Field Shot  
「F. T.」=Free Throw 「P. F.」=Personal Foul, 「T. P.」=Tecnical  
Foul, 「B. P.」=Bad Pass 「基攻数」=基本攻撃回数 「基攻率」=基本攻撃成功率  
「O. B.」=Out of Bound

第3表 7 試合平均スコア

得点	F (ゴール下)	中	長	FS成功率	FT成功率	OR	DR	BP	Viol		
日本	69	33	(11/24)	10/36	5/17)	27/76	15/24	10	16	5	10

			(45.8%	27.7%	29.3%)	35.5%	62.5%	25.0%	61.6%	16	
外国	92	25	(30/47	5/17	2/4)	38/68	18/27	10	30	13	12
			, (63.8%	29.3%	50%)	55.8%	66.6%	38.4%	75.0%	25	

(註 1) 7 試合合計を各項目毎に 7 で割り、小数第 1 位は四捨五入した。

(註 2) % は小数第 2 位以下切捨てた。

ゲームの勝敗は、チーム力の強弱にかかわらず、原則的には同回数持ち得る基攻数（ボールを所有してから、それを完全に失う迄を一回と考える）において何れのチームがより多くの得点を挙げ得たかによって決定されるものである。

得点は F. S の成功と、F. T の成功によって挙げられるものであるから、ゲームの勝敗の検討は次の二つについて合わせ検討しなければならない。

$$\textcircled{1} \frac{\text{F. S 成功回数}}{\text{F. S をする為めに失った基攻回数}} = \text{基攻率}$$

$$\textcircled{2} (\text{F. T で挙げ得た得点}) - (\text{F. T で失った基攻数} \times \text{基攻率} \times 2) = \text{F. T 有効点}$$

$$(\text{A チーム F. T 有効点}) - (\text{B チーム F. T 有効点}) = \text{F. T 成績差}$$

この二つの式を検討する為に必要な資料の殆んどは報告書にあるが、その中に記載されていないものについては、「第 3 表」のスコアを基礎として、日本におけるゲームのスコアから類推して作ることが出来る。「第 4 表」はそれ等を示すものである。

#### 第 4 表 基本攻撃回数の算出式

$$\textcircled{1} \text{基攻数} = \text{A} + \text{B} + \text{C} + \text{D}$$

A = 攻撃の成功によって規則によってボールの所有を失う回数  
= a + b

a = 自チームの F. S 成功数

b = 自チームの F. T の最後のスローの成功数

B = 味方攻撃の失敗。相手防禦の成功によって、ボールを奪取された回数 = c + d + e

c = 相手チームの D. R 獲得数

d = 味方の B. P 相手のインターセプトの回数

e = 攻撃中の J. B で相手に獲得された回数

C=味方攻撃の失敗によって、規則によってボールの所有を失う回数  
=f+g+h+i

f=自チームの種々の Viol

g=ラインアウト

h=攻撃中の P. F

i=T. F

D=タイムアッププレイ(註1)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	
日本	27	11	42	5	2	10	0	1	0	=98
外国	38	12	22	13	1	12	0	1	0	=99

(註1) タイムアッププレイとは、ゲーム開始の J. B を先ず獲得し、タイムアップになる直前に攻撃を終了することによって成立するプレイで、それによって相手よりハーフ毎に1回多くの基攻数を持つ事が出来るプレイである。(註5)に述べる如く J. B の獲得は、外国チームに有利であったと考えられるのであるが、それのみによって成立するプレイではなく、またこのプレイの成功には多分に偶然性も考えられるので、こゝでは検討しないことにした。

基攻数 99 とか 98 とは、日本と外国との間にボールの所有の移り交りのあった回数を示しているものである。同じ 40 分間でこれらの回数に増減が出来るのは、プレイそのもののスピードと無関係ではないが、最も多く関係するのは容易にはシュートさせないという両チームの防禦力の強弱が原因となるものである。

約100回の基攻数とは、日本における常識から考えると両チームか或はどちらか一方のチームの防禦力が強かったとは言えない事を物語っているものである。

以上でゲームの勝敗数を検討するために必要な資料は全部揃った事になる。

これらを1表にまとめれば「第6表」となる。

第6表 勝敗因検討の為のスコア一覽表

①基攻数=MP	+F.Tで失った回数	+F.Sの成功で失った回数	+F.S失敗で失った回数
日本 98=18(5+2+10+1)	+16	+27	+37(42-5)
外国 99=27(13+1+12+1)	+16	+38	+18(22-4)
②F.S及R.Bの成賃 (F.S成功率)	O.R%(F.S F.T)	D.R(F.S F.T)	
日本 27/76(35.5%)	14/56(25%)	(12/49 2/7)	22/36(61.1%)(18/30 4/6)
外国 38/68(55.8%)	14/36(38.9%)	(12/30 2/6)	42/56(75%) (37/49 5/7)

③F.T の成績	(与へられた回数)	(失った回数)	(成功で失った回数)	(F.T 成功率)
{ 日本 外国	18	16	11	15/24(62.5%)
	18	16	12	18/27(66.6%)

## (2) 野投成績の検討

ゲームの勝敗は F. S 成績と, F. T 成績の優劣によって決定されるが, F. S 成績についてのみ考えるならば, そのチームの基攻率とそのチームの野投成績となる。

基攻率とは前述の如く  $\frac{\text{F. S 成功数}}{\text{F. S をする為にした回数}}$  であったが, (F. S をする為にした回数) とは, ① (基攻数-F. T で失った基攻数), ② F. S で失った基攻数(F. S 成功数+F. S 失敗で失った回数(相手の D. R 数-相手の F. T の D. R 数))+M. P 回数, ③ [(F. S 試投数+F. T の O. R 獲得数)-O. R 獲得数]+M. P 回数であるが故に, この成績を決定するものは, ① F. S 試投数, ② F. S 成功率, ③ R. B 獲得数, ④ M. P 回数の4つであるということが出来るのである。

この考え方で両チームの基攻率を算出すれば

基攻率	①	②	③
{ 日本 27/82 32.9% 外国 38/83 45.7%	$\frac{98-16'}{38}$	$\frac{\{27+(42-5)\}+18'}{38}$	$\frac{\{(76+2)-14\}+18'}{38}$
	$\frac{99-16'}{38}$	$\frac{\{38+(22-4)\}+27'}{38}$	$\frac{\{(68+2)-14\}+27'}{38}$

基攻率が日本 32.9%, 外国 45.7% とはもし両チームに1回も F. T がなかったと仮定すれば,

$$98 \times 32.9\% \times 2 = 64.484 \div 65 \quad (\text{日本の挙げ得る得点})$$

$$99 \times 45.7\% \times 2 = 90.486 \div 91 \quad (\text{外国の挙げ得る得点})$$

$$96 - 65 = 26 \quad (\text{F. T のない場合の得点差})$$

ゲームの最終には, 26 点の差が出来る程の差であることがわかる。

### I. ミスプレイの検討

#### A. MP の得点に及ぼす影響の検討

① 基攻数-F. T 数-M. P 数=F. S で終了した回数

$$\begin{cases} \text{日本} & 98-16-18=64 \\ \text{外国} & 99-16-27=56 \end{cases}$$

② F. T 及び M. P が 1 回もなかったと仮定した場合の基攻率

$$= \frac{\text{F. S 成攻率数}}{\text{F. S で終了した回数}}$$

$$\begin{cases} \text{日本} & \frac{27}{64}=42.1\% \\ \text{外国} & \frac{38}{56}=67.8\% \end{cases}$$

③ F. T および M. P が 1 回もなかったと仮定した場合の得点差

$$\begin{cases} \text{日本} & 98 \times 42.1\% \times 2 \doteq 82.516 \doteq 83 \\ \text{外国} & 99 \times 67.8\% \times 2 \doteq 135.244 \doteq 135 \end{cases}$$

$$135 - 83 = 53$$

④ M. P があった為に挙げ得なかった得点

$$\begin{cases} \text{日本} & 83 - 65 \doteq 18 \\ \text{外国} & 135 - 91 \doteq 44 \end{cases}$$

⑤ 両チームにおける M. P 1 回の価値

$$\begin{cases} \text{日本} & 18 \div 18 = 1 \\ \text{外国} & 44 \div 27 = 1.62 \end{cases}$$

以上の検討式から言える事は

- ① M. P によって、得点の上では日本 18、外国 44 点挙げ得べき得点を失っている。即ち、52 点差のゲームが 26 点差になった主なる原因は、両チームの M. P 回数の差によるものであったということである、(F. T の成績は後述の如く殆ど同じであるが故に)
- ② 原則的には、1 回 M. P するも、或は、させるも同価値のプレイと考えられるのであるが、基攻率に相当の差がある場合には、それだけ M. P 1 回の価値が違ってくるということである。
- ③ 以上の事は O. R に続いての攻撃において日本は身長差の為、第 1 回目の攻撃と殆んど同じ程度の攻撃しか出来なかったこと(後述)及び M. P に引き続いての攻撃は身長差が大きく影響するとは考えら

れず、日本におけるとほぼ同様な良質の攻撃が出来たものと考えられる(第7表参照)ので、26点差のゲームを、先づ同点にまでする為に、最も効果的な方法は、相手により多く M. P をさせるということと、及びそれに引き続いての攻撃の機会を出来るだけ多く持ち得る様なゲームをするという事が出来るのである。

第7表 攻撃開始原因別攻撃成功率表

(日本の六大学のリーグ戦の資料より)

(攻撃成功率) (FS 成功率) (被反則率) (攻撃失敗率)

	(攻撃成功率)	(FS 成功率)	(被反則率)	(攻撃失敗率)
A. M. P より	44.4%	52.1%	16.0%	14.8%
B. D. R より	32.1%	44.3%	13.2%	27.5%
C. O. B より	29.6%	41.3%	16.2%	27.4%
平均	32.1%	43.4%	15.3%	25.9%

## B. M. P の内容の検討

## ① M. P の発生率

日本	18/98=18.3%
外国	27/99=27.2%
日本の大学リーグ	20.3%

## ② 技術上の M. P : 規則上の M. P

日本	(5+2+1)8:10=44.5%:55.5%=1:1.245
外国	(13+1+1)15:12=55.5%:4.45%=1:0.801
日本の大学リーグ	14 : 6=69.4%:30.6%=1:0.441

以上の検討式から言える事は

① 日本の 18.3% とは、代表チームとしては決していい成績であったとは言えない。しかし又この数字は、その反面相手が如何に大きくともボールをキープするという点のみから見れば、殆んど脅威にはならなかったということをも示している..

② 外国が 27.2% であったとは、日本の防禦方法の成果によるものであった事を「第1表」は明瞭に示している。即ち、プレス防禦を僅かしかプレイしなかった第一戦には、日本の 20 に対し、ハンガリーは 16 であった。その後は、10, 15, 10, 9, 6, 12 というように相手がより多く M. P しているのである。

㊦ 又この事実は、相手のミスを誘発させるということのみについてみれば、相手チームの強弱とは余り関係がない事を示している。相手の強弱が現われるのは、それに対する反撃の面においてであったのでろう。

㊧ 規則上の M. P が日本に 10 回あったということは、前田コーチが強調しているように、プレイヤーが審判の国際慣習になれていなかった為と考えられる。もし日本の審判がこれらのゲームを全部吹いたとしたら、この種 M. P が 6 回以上になったとは考えられない。

㊨ 外国の技術上の M. P の 15 回は、日本の防禦方法を考えれば一応納得のゆくものである。しかし、規則上の M. P が 12 回もあったという事は何を意味しているのであろうか。この 12 回の中には、日本の防禦方法に起因するものも何回かは含まれていることとは思いが、それにしても 審判の国際慣習になれていないと言われる日本とほぼ同じ回数であったとは、何か外に原因があったと考えざるを得ない。

その原因としては、外国がボールのキープ力及びボディコントロールの力に劣っていたとは考えられないので、何処の国のチームでも、国際ゲームは自国の審判慣習との差異で損をしているんだと言うことのみしか考えられない

㊩ もし以上の事が正しいとすれば、前田コーチの主張する国際慣習の審判というものにはあり得ないことになる。あるのは各国流の各地方流の審判のみということになる。即ち前田コーチは報告書の中では審判によって味方が損をした点のみ挙げて居られるが、相手チームが損をした点については一つも挙げていない。相手チームが損をした点とは、日本流の審判が国際的にも正しくあったが為に得をしたという点であるわけである。

㊪ 以上の点から考えれば、国際試合において審判による損を最小限にする方法は、規則の正しい解釈による審判ということになる

何故ならば、たとえ審判のやり方に、日本流、アメリカ流、又は東洋流、欧州流、南米流というような国によって、或は地方別によって審判慣習の差異が若干あるとしても、そこに共通する大部分のものは

規則の正しい解釈による審判であるからである。日本が 10, 外国が 12 であったという事は, 日本の審判がそれだけ規則をより正しく解釈して審判をしていた事を物語っているとも考えられるのである。

㊦ しかしこの事は, 前田コーチの主張される事を全面的に否定しているものではない。なぜならば, 前田コーチの指摘される中には日本の審判が正しくない為に損をしたものも幾つかは含まれているし(例えば, 3 秒ルールやインテンショナル・ファウルは日本では空文に等しいと指摘している)又, どちらが正しい規則の解釈の仕方であるかについては問題があるとしても, 多くの地域に共通している審判慣習が実在している事も事実であり, それ等を認識するという事は大切な事である。

㊧ 結論は, 日本の審判は規則の正しい解釈による審判という事のみ専心努力し, プレイヤーは多くの国際試合を体験し, 地域別の審判慣習を理解すると同時に, ゲームの途中でも審判の流儀に対応出来るような対応性の能力を発達させなければならないという事である。

この問題は 10 点近くの得点の増減に関係する重大なる問題である。

## II. リバウンドボールの検討

前田コーチはその報告書の中に, オリンピックの敗因とその対策について次のように言っている

「矢張り決定的な原因は, 身長, 体格の差にあるとしか考えられない」「日本代表チームとしては, 少なくとも 190 cm 以上の選手 3 人が, まともにプレイの出来るよう教育しなければならない」「特に, ゴール上のリバウンドプレイを身につける事である。今後の国際ゲームは, ゴール上のプレイが出来なければ勝つ事は出来ない」

これ等の言葉は, 日本の将来のチーム作りにおいて貴重なる方向を与えているものであるが, 果してこの身長差が, その最も直接的に影響すると考えられる R. B.においてどの程度の差があったのであろうか。

### A フォロー力の比率の検討

- ① O. R : D. R
- |   |       |                   |                    |           |
|---|-------|-------------------|--------------------|-----------|
| { | 日本    | 14/56 (25.0%) :   | 22/36 (61.1%) =    | 1 : 2.444 |
|   | 外国    | 14/36 (38.9%) :   | 42/56 (75.0%) =    | 1 : 1.928 |
|   | 大学リーグ | 848/2195(38.6%) : | 1347/2175(61.4%) = | 1 : 1.590 |

② ミスショットに対する獲得比

- |   |          |         |           |           |           |
|---|----------|---------|-----------|-----------|-----------|
| { | 日本の M. S | 日本 OR : | 外国 D. R = | 14 : 42 = | 1 : 3     |
|   | 外国 M. S  | 外国 OR : | 日本 D. R = | 14 : 22 = | 1 : 1.570 |

以上の検討式から言える事は

④ R. B における防禦側の利益は、技術の上達とどのような関係があるか、現在の所私には分らない。しかしこれらのゲームに限って見るならば、上達につれてより明瞭なものになると考えてよいようである、(7 試合の個々のゲームにも殆んどこれと同じ傾向が明瞭に見られる)。

⑤ 日本が OR. DR 共に劣勢であったが、その原因の重なるものは身長差であって、技術的な差ではなかった。これはスペインに対して(身長差-3.5%)は優勢であり、他の国に対しては(身長差-8.8 cm ~ -16.5 cm) ほぼ身長差に比例して劣勢であった(対米戦は例外) ことから言える事と思う。

⑥ 志村宗孝氏(山形市中央高校)は、R. B の獲得は攻防両者の占める空間の比率によって決定されるという仮定のものに、身長差がどの程度にその獲得比に影響するかを研究している。彼の研究によれば(第8表)

第8表 身長差による R. B の獲得比

	O. R	D. R	ルーズボールにし得る範囲		
	(外側)	(内側)	O. R	D. R	
身長差のない場合	33%	67%	(16%~48%)	(52%~84%)	
{	O側が 10 cm 小さい場合	26%	74%	(10.5%~39.5%)	(60.5%~89.5%)
	O側が 20 cm 小さい場合	18%	82%	(6.5%~26.0%)	(74.0%~93.5%)
{	D側が 10 cm 小さい場合	42%	58%	(28%~58%)	(42%~72%)
	D側が 20 cm 小さい場合	48%	52%	(32%~64%)	(36%~68%)

彼の仮設及び攻防両者の占める空間の計算の仮定については、尚研

究の余地ありと考えられるが、身長差のない場合の比が 33% : 67% で実際のゲームの統計と近い値を示しているので、その程度においては信用出来るものと考えられる。

平均身長約 10 cm 小さかった日本の R. B の成績が 25% と 61.1% であった事は、身長差の当然の結果であった事をこの表は示している。

⊖ R. B における日本の劣勢さは、特に O. R において明瞭である。

何故特に O. R において不成績であったか、この問題の解決には、教大生多賀谷、寺沢両君の研究が大いに参考になると思う。

後等の研究の要点は、R. B が防禦側に有利に獲得されている原因を

i 「とびつき易い」	(人数上の優位差)	A の利益
ii 「とり易い」	(位置の有利)	B の利益
iii 「ひろい易い」	(位置の有利)	C の利益

の 3 つに分析し、それ等がどの程度の有利さを持つものであるか、実際のゲームのスコアから研究したものである。そしてその結論は、① 防禦側の有利さの最も大きな原因となるものは A の利益である、② もし攻防両者に人数上の差がない場合には、次いで C の利益がその原因となり、③ B の利益は極く僅かである、ということであった。

即ち、R. B は、とびついたものによって獲得されるもので、防禦側が一般に有利であるのは、とびつき易い位置にある事が多いという所にその主たる原因があるというのである。

この点から、日本の R. B の成績を検討すれば、D. R が比較的良好な成績であったのは、とびつき易い位置にあったが故にとびついたらであり、O. R が不成績であったのは、とびつきできなかったが故にとれなかった所に、その原因があったといわざるを得ないのである。少くとも、D. R と同じ程度にとびついているならば、O. R の成績は、D. R におけると同じ程度の劣勢さ迄にはなり得た筈である。

⊕ 志村氏の研究によれば、R. B を両手で確保するという気持でなく、ボールをルーズボールにするだけというならば、約 ±15% の

余地があることを示している。

又、フォロー参加人員に差のある場合の獲得率の研究(第9表)を見れば、たとえば身長に10cmの差があったとしても、尚有利に獲得出来る可能性がある事を示している。

第9表 R. B における人数差と身長差との関係

1: 0=	身長差に関係なく	100% 有利
2: 1=	身長差 16 cm	に相当する
3: 1=	" 25 cm	"
3: 2=	" 9 cm	"
4: 1=	" 30 cm	"
4: 2=	" 11 cm	"
4: 3=	" 7 cm	"

⊙ ±15% の可能性は純技術的な問題であるが人数上の問題は R. B に対するシステムの考え方によって相当カバー出来るものと考えられる。

しかし、±15% の可能性及び人数上の優位という事は、身長チームとて持ち得るものでこれによって一方的に有利になると考えるのは早計である。いずれのチームが、これらの利益をより多く持ち得るかは、とびつき得る為のフォローのタイミングのつかみ方によって決定されるもので、この事の再検討こそ、これら問題解決の共通のキーポイントとなるものと考えられるのである。

**B. フォロー有効率の検討**

① 基攻数-M. P-F.T の与えられた回数 =  $\frac{\text{F. S で初まって}}{\text{F. S で終わった}}$  回数

{	日本 98-18-	18	=62
	外国 99-27-	18	=54

(1) こゝで検討するのは、F. S 力とフォロー力であるので、F. T とそのフォローは、性質の異なるものとなるから(両チーム共に2回宛ある)こゝでは別にして考えなければならぬ。

②  $\frac{\text{F. S 成功数}}{\text{F. S で終わった回数}} = (\text{F. S 力} + \text{フォロカー力})$

{	日本	$\frac{27}{62}$	=43.5%
---	----	-----------------	--------

$$\left. \begin{array}{l} \text{外国} \end{array} \right\} \frac{38}{54} = 70.5\%$$

③ (F. S 力+フォロカー力)-F. S 成功率=フォロー力指数

$$\left\{ \begin{array}{lll} \text{日本} & 43.5\% & -35.5\% = 8.0\% \\ \text{外国} & 70.5\% & -55.8\% = 14.7\% \end{array} \right.$$

④ フォロー力指数÷F. S に対する O. R 獲得数=フォロー有効率

$$\left\{ \begin{array}{lll} \text{日本} & 8 \div (14-2) & = 0.666 \\ \text{外国} & 14.7 \div (14-2) & = 1.225 \end{array} \right.$$

⑤  $1 - M. P \text{ 回数比} - F. T \text{ 回数比} = \frac{\text{第1回目と2回目以降の攻撃成功率に差がなかったと仮定した場合のフォロー有効率}}{\text{第1回目と2回目以降の攻撃成功率に差がなかったと仮定した場合のフォロー有効率}}$

$$\left\{ \begin{array}{lll} \text{日本} & 1 - 18/98(0.183) - 18/98(0.183) & = 0.634 \\ \text{外国} & 1 - 27/99(0.272) - 18/99(0.181) & = 0.547 \end{array} \right.$$

⑥ 第2回目以降の攻撃がよりよい攻撃であった比率

$$\left\{ \begin{array}{lll} \text{日本} & 0.666 - 0.634 & = 0.032 \\ \text{外国} & 1.225 - 0.547 & = 0.678 \end{array} \right.$$

以上の検討式から言える事は

① 同じ  $(14-2)=12$  回の O. R の獲得数ではあったが、日本はそれによって F. S 成功率 8% の向上に価する効果しか挙げ得なかったに対し、外国は、その約 2 倍の効果を挙げ得た事を示している。

これは結局、1 回の O. R が F. S 成功に結びつく可能性に大きな差があった事を物語っているものである

② フォロー有効率とは、フォローの獲得がいかに得点の増加に貢献したかを表わす指数であるが、その指数値は次の事を意味するものである。

i もし O. R 獲得後の攻撃が、すべて F. S に結びついたらと仮定すれば、O. R 有効回数比 (直接又は間接に得点に貢献した回数比) は即ち、第 2 回目以降の野投成功率という事になる。

ii ゲーム全体としての F. S 成功率は  $\frac{\text{(成功数)} + \text{成功数}}{\text{(1 回目の試投数} + \text{(2 回目以降の式投数))}}$  であるが、第 1 回と 2 回目以降の F. S 成功率には  $\frac{\text{第 2 回目以降の}}{\text{F. S}}$  ほとんど差がないものであるが故に (44.4%, 45.4%)

F. S 成功率  
成功率  $\div 1$  となる。

iii 即ち、フォロー有効率 1 とは、OR 獲得数の F. S. 成功率分の回数だけを直接又は間接に得点の増加に貢献した有効なフォローであったという事を意味するものである。

iv それ故に、もしフォロー有効率が 1 より M. P 回数比, F. T 回数比を差引いた指数である場合には、第 1 回の攻撃と第 2 回目以降の攻撃とは、その成功率において全く同じであったという事で、それより大きな絶対値であるならば、より大きな数値だけ、よりよい攻撃であった事を意味するものとなる (34 年 7 月の関東学生選抜対サンフランシスコ大学のゲームのフォロー有効率は 0.76, 1.06 であった)。

⊙ フォロー有効率が、日本 0.666, 外国 1.225 であった事は、共に O. R 獲得後の攻撃がよりよい攻撃であったことを示すものであるが日本は 12 回の O. R を獲得しながら、 $12 \times (35.5\% \times 0.666) = 2.83716 \div 3$  回しか直接又は間接に得点に結びつける事が出来なかったのに対し、外国は同じ 12 回で  $12 \times (55.8\% \times 1.225) = 8.204 \div 8$  回も得点に結びつけ得たという事を意味するものである。換言すれば、日本は O. R の獲得によって、最大限 6 点の得点能力しかなかったのに対して、外国は 16 点もその力を持っていたという事である。

第 10 表 O. R 前と後の攻撃成功率

	(攻撃成功率)	(F. S 成功率)	(被反則率)	(攻撃失敗率)
第 1 回の攻撃	32.6%	44.4%	13.0%	26.6%
第 2 回目以降の攻撃 (平均)	42.0%	45.4%	18.0%	8.1%

第 10 表は、日本の大学リーグにおける成績であるが、これと前例を比較する時に、両チームの身長差が如何に大きくその成績に影響していたかがわかる。

⊙ 身長差はフォローの獲得率及び、その有効率に共に影響しているが、その獲得率よりは有効率の差の方がより大きな勝敗因になっている (前者は約 7 点の差と考えられ、後者は約 10 点の差であったと考えられる。理由省略)。

### III 野投試投数及びその成功率の検討

#### A. 野投試投数の検討

より多くの F. S を成功させる為には、試投数をより多く持つと共に、より高い成功率を撃げる事が必要である。両者ともに劣勢ならば、失敗し、いずれかに一長一短あればその優劣の差によって成否が決定される。

原則的には同じ基攻数であり乍ら、両チームの試投数に差が出来るのは、試投数減少の原因となる M. P 及び F. F があり、その増大の原因となる R. B があるからである。

即ち日本 76、外国 68 試投数は次のようにして得られたものである。

$$\begin{array}{l} \text{基攻数} - \left( \frac{\text{FT で失った}}{\text{回数} + \text{M. P}} \right) + \left( \frac{\text{O. R} - \text{FT ミ}}{\text{スの獲得数}} \right) = \text{F. S 試投数} \\ \left\{ \begin{array}{l} \text{日本} \quad 98 - (16 + 18) \quad + (14 - 2) \quad = 76 \\ \text{外国} \quad 99 - (16 + 27) \quad + (14 - 2) \quad = 68 \end{array} \right. \end{array}$$

F. T については、特別な性質があるので別に検討するが、とに角日本が相手より多い F. S 試投数を持ち得たという事は、そのことだけに限って見れば、有力な勝因にこそなれ、敗因となるものではない。

即ち、ボールのキープ力、或る種の防禦力及びフォロー力等においては一長一短あるとしても、その総合力においては決して日本の敗因はなかったという事である。

この事は、もし両チームの O. R の獲得数 12 回がフォロー力が同等であったが為のものであるならば、間違いなく確実に言える事である。しかし、実際は外国チームのミスシュートがより少なかった (F. S 成功率の高かった) 所にその原因があるので、一応検討する必要があるが、O. R 15% 程度の差が M. P 9 回差以上のものであるとは考えられない。

何故ならば、極く簡単に考えて、もし外国チームが F. S 成功率がより低くて、R. B の機会を日本同様 56 回あったとする。この場合外国の O. R 獲得数は、 $56 \times 38.9\% = 21.784 \div 22$  回となり、日本との差は  $22 - 14 = 8$  回となる。これだけでも、 $9 - 8 = 1$  で、M. P の方が

より有利であるが、その上に9回の M. P は完全に9回の F. S 試投数を失った事になるのに対し、8回の O. R 獲得は、それより、M. P 及 F. T 回数比を差引いた回数が、F. S 試投数になるものであるから、その差は1回以上であった事は確実であるからである。

以上のように、野投試数増減に関係するプレイの個々については、彼我一長一短あるとしても、その総合力において、もし敗因がないとすれば、オリンピックチームの真の敗因は、唯、F. S 成功率の低さにあったのだと断言せざるを得ないのである。

### B. 野投成功率の検討

F. S 成功率は、シュート技術そのものの優劣と、シュートのやり方（場所、時機、人、方法等）及び相手の防禦力の強弱等によって決定されるものである。

両チームの F. S 成功率は、日本 35.5%、外国 55.8% と 20% 以上の差が出来たが、プレイヤーのシュート技術そのものに、これ程大きな差があったとは考えられない。この事は FT の成績（日本 62.5%、外国 66.6%）が或る程度これを裏書している。

もし、シュート技術そのものには大きな差がなかったとすれば、約 20% 差の主なる原因はそのやり方と、相手の防禦力にあったという事になる。

同じチームで、シュートのやり方によってその成功率を高めようとする方法の考え方は唯一つしかない。それは成功率の高いもの（人、方法、場所、時機）で出来るだけ数多くシュートするという事である。この事は次の例を見れば一見にして明瞭である。

もの	個々の成功率	第一例		第二例		
		(試投数)	(成功数)	(試投数)	(成功数)	
A	60%	10	6	(10+5)15	5	
B	40%	10	4	10	4	
C	20%	10	2	(10-5) 5	1	
		30	12	30	14	46.6%

A, B, C とは、それが攻め方、プレイヤー、場所、時期を意味するものであっても同じように適用されるものである。

F. S 成功率の検討は、これら攻め方、人、場所等すべてについて検討せねば充分とは言えないが、ここでは場所以外の項目については資料がないので、知り得る一般的事項のみにとどめ、主として場所について検討する事にする。

前田コーチのスコアでは、シュート地域をゴール下、中、長と三地区に分けてあるが具体的な分け方については何も明らかにしていない。それ故に、私は、最も常識的な分け方即ち、ゴールと F. T ライン迄と、ゴールを中心にして、25 呎を半径として画いた線によって出来た三つの地域を意味するものとする。

この3地域における両チームの試投数及びその成功数、成功率は、第 11 表のようであった。第 12 表は青井水月氏の第 3 回アジア大会における勝チーム、負けチーム別の地域別試投数及びその成功数の一覧表である（地域の分け方に若干の相違があるが、彼のいうポストゾーンはゴール下、右、左、正面ゾーンは中、長、地域と解釈する事にする）。

第 11 表 各地域別 F. S 成功率

		ゴール下	中	長	中長計	合計
日 本	7 試合合計	77/165 (46.6%)	73/249 (29.3%)	38/121 (30.0%)	111/371 (30.0%)	185/535 (35.1%)
	試投数比	165/535 (30.8%)	249/535 (46.5%)	121/535 (22.7%)	370/535 (69.2%)	
	成功数比	77/188 (40.9%)	73/188 (38.3%)	38/188 (20.8%)	111/188 (59.1%)	
外 国	7 試合合計	212/328 (64.6%)	38/116 (32.7%)	15/31 (32.7%)	53/147 (36.0%)	265/475 (55.0%)
	試投数比	328/475 (69.0%)	116/475 (24.4%)	31/475 (6.6%)	147/475 (31.0%)	
	成功数比	212/265 (80.0%)	38/265 (14.2%)	15/265 (5.8%)	53/265 (20.0%)	

第 12 表 各地域別 F. S 成功率 (青井氏の研究)

		ゴール下	中長計	合計
勝 チ ー ム	F. S 成功率	779/1300(59.9%)	451/1087(41.5%)	1230/2380(51.5%)
	試投数比	1300/2387(54.5%)	1087/2387(45.3%)	
	成功率比	779/1230(63.3%)	451/1230(36.7%)	
敗 チ ー ム	F. S 成功率	517/1020(50.6%)	467/1216(38.4%)	984/2236(44.0%)
	試投数比	1020/2236(45.6%)	1216/2236(54.4%)	
	成功率比	517/984 (52.5%)	467/984 (47.5%)	

以上の二表から言える事は

① 各地域別の成功率がより悪いのは、もしシュート技術に殆んど差がなかったとすればそれは相手の防禦力によるものと考えなければならぬ。

② 各地域別の成功率の差は 18%, 3.4%, 16.9% となっているが、合計の差 20.6% も差のある地域はない。これは、各地域毎にその成功率が悪かったばかりでなく、そのシュートのやり方が悪かった事を示すものである。

即ち、日本は最も成功率の低い中距離地域に 46.5% の試投数を持ったのに対し、外国は最も高率のゴール下地域に約 70% の試投数を持つ事が出来たという所にその原因があったのである。

③ 長距離地域の 16.9% の差は、日本の低率と外国の予想外の高率によって出たものであるが、外国チームの高率はその地域からの試投数の少かった (6.6%) ことから考えると、① ゴール下へ容易にボールを運べるので、長距離シュートの必要を感じなかった、② プレス防禦の為長距離シュートのチャンスが少かった、③ 特定のプレイヤーのみが、④ 特定の選ばれたチャンスのみシュートした、というような原因が考えられ、中でも③と④がその成功率を高めた主なる原因でたつと想像されるのである。

何故ならば、この地域の F. S を、誰でもがチャンスがあれば、何時でもシュートしたと考えられる中距離地域と合計して見ると、その成功率は、36% となり、日本との差は 6% となるのである。この事は外国のプレイヤーの、誰もが中距離シュートそのものに明瞭な差が

ある程優れていたとは言えない事を示しているもので、16.9% 差の大部分はそのシュートのやり方がよかった為に挙げられたものである事を物語っているものである。

㊦ 長距離シュート地域の日本の低率は第 13 表の個人シュート成績表と外国チームの好成績の原因とを対照して考えればその原因を容易に知る事が出来る。

	(糸山)	(杉山)	(齊藤)	(東海林)	(今泉)	(鎌田)
長	0	7/32	1/6	13/28	5/11	1/5
		21.8%	16.6%	46.4%	45.4%	20%
中	4/15	5/13	3/18	15/37	8/27	7/17
	37.5%	16.6%	16.6%	40.5%	29.6%	41.1%
ゴム 下	10/26	10/22	12/22	1/9	6/12	5/11
	38.4%	45.4%	54.5%	11.1%	50%	45.4%

即ち、その原因とは、こうやれば近き将来により良いチャンスが出来るという見通しを持ち得るような攻撃方法と、その力を持っていなかったが故に、誰もがチャンスにはシュートしたからであり、又シュートのチャンスの判断が粗雑であったという所にあったのである、もしプレイヤーが以上のような信頼出来る力を持つ事によって、限定されたプレイヤー及びよりよく選ばれたチャンスのみにシュートするという事に成功すれば、現在のこのメンバーでも外国チームの成功率に近い%を挙げる事は決して不可能ではないと思はれるのである。

㊧ 相手の防禦力、特に彼我のリーチの差異は、中距離シュートが最も影響されたものと考えられる。

ゴール下においては、シュートの投げられる方向が真上の方向に近いので、叩かれない為にループを変えなければならないのは、中距離シュート地域よりのシュートに比較すれば、より少ない。

中距離シュート地域においては、使われたシュートの大部分はジャンプシュートであったと考えられるのであるが、ジャンプしてシュートの発点が高くなり、ゴールの高さに近づけばシュートが入る為の最良のループは、より低くならなければならない。(シュートの最良の

ループは、ボールとゴールの大きさの相対比及びシュートの発点のゴールに対しての角度によって決定されるものである)

その故に、予想外の防禦側のリーチの長さは、比較的に低くなければならぬ最良のループを狂わす事になるからである。

即ち、この地域からは、シュートを叩かれまいと注意すれば、如何に相手が大きくともループを高くする事によって叩かれないという事

シュート成績表

(金川)	(奈良)	(大島)	(若林)	(志賀)	(増田)
6/14	1/3	2/16	2/5	0/2	0/1
42.8%	33.3%	12.5%	40.0%	0%	0%
4/10	9/31	9/23	5/20	3/9	1/7
40%	29%	39.1%	25%	33.3%	14.0%
2/9	6/11	14/22	17/13	0/1	4/9
22.2%	54.5%	63.6%	53.8%	0%	44.4%

は可能である。しかしその為には、入りの悪い(最良のループを画かない)シュートをせざるを得ないのである。

この地域における 3.4% の差の原因は全くここにあったと思われる。

③ オリピックにおいて中長距離からのシュートが 36% と 30% で、アジア大会の 41.5% と 38.4% より共に劣るのはゴール下の意味する地域の広さに若干の相違がある事と、アジア大会当時よりは、守らなければならない防禦陣の大きさが拡大された(少くとも日本は拡大した)所にその原因があると考えなければならない。

④ ゴール下地域において、味方の成功率が低く相手方がすばらしく良かったのは、① フォローアップシュートの成功に約 2 倍の差異があった事(フォロー有効率で前述)、② 叩かれる事を意識しすぎて、アンバランスのフォームでのシュートをやり始めた事等がその原因として考えられる。

この事は、この地域の成功率が、試合の順に、66.6%, 64.2, 52.7%, 33.3%, 35.7%, 37.5%, 55.5% と変化して行った事を見れば容易に想像出来るのである。何故ならば、急激に日本のプレイヤーのゴール下におけるシュート力が半減するとも、又相手方の防禦力が倍増する

とも考えられないからである。即ち、直接に相手方の防禦力によって低下させられたというよりは、相手防禦力の眩影にまどわされて自分で成功率を低めたのが実状であったと推察されるのである。もしこれが本当であるならば、ゴール下における 18% の差は、一方的な努力によって相当その差を縮める事が出来る可能性がある事を示しているものである。

又、この一連の成功率の変化は、ゲームで受けたショックや、ゲームの雰囲気慣れるには、最小限三試合以上が必要である事を物語っている。この事は、FT の成績に於いても明瞭に見る事が出来るのである。

㊦ 以上の検討によつての結論は、各地域毎に於ける成功率の低さは、シュート技術そのものに大した差がなかったものとすれば、一般的には、相手の防禦力によるものと考えなければならないものであるが、実際は、その明瞭な差の大部分は、長距離シュート地域においては、そのやり方にゴール下地域においては、相手チームのリーチの長さの眩影によるものであって、防禦力によって低下させられたものは、中距離シュート地域のみであるが故に、自分等の努力如何によつては、20% 近い大きな差を、相当大巾に一方的に縮める事が出来る可能性があるものであったという事である。

㊧ シュート技術そのものを、現在その差は僅かであるとしても外国チーム以上に伸すということは、日本の現在の環境で短時日で望む事は困難のように思われる。又いくらかはの身長差を縮める事が出来たとしても、尚明瞭な身長差がある間はフォローアップシュートの成功率において同等になるという事も困難のように思われる。この様な日本の現状においては前述の如く各シュート地域別の明瞭な成功率差が一方的な努力によって、相当大巾に縮小出来る可能性のあるものであるとしても、その成功率においてより優れるという事は困難であると考えなければならない。それ故に、日本が外国の F. S 成功率に匹敵する成功率を挙げる為にはシュートのやり方を工夫する以外にはないという事が出来るのである。

今回のスコアや、アジア大会の結果が明瞭に物語っているように如何に名シューターが揃ったとしても、最もシュートの入りのいいのはゴール下であり、ゴール下に全試投数の 50% のシュートをする事が出来るかにその成否の鍵があった事を見れば、シュートのやり方が如何にあらねばならぬかは容易に知る事が出来るのである。

(特にアジア大会の結果は、この地域でのシュートは、最小限、成功率約 60%、試投数比 50% 以上、成功数比 60% 以上で、この三つの点で約 10% の優勢さがなければ勝チームになり得ない事を示しているのである。)

即ち国際試合においてフォローアップシュートでゴール下の得点をより多く持つ事もシュート技術そのものに優れる事も困難と思われる日本の現状でこの地域でより多くの試投数を持ち、より多くの成功数を挙げ得る唯一の道は、ゴール下地域でシュートのチャンスを作る力をより多く持つ事以外にはないという事である。何処からでも“空いていたらシュート”そしてそれを決める力、或はそれをフォローして決める力を持つ事は望ましいし、正しいバスケのあり方かも知れない。しかし、あるべきやり方でプレイしたのでは、強いものがいつでも勝つに決まっている。望ましい事と、やって出来る事と混同しては、何時になっても成功の道は開けないのである。

今度の代表チームでも、長距離シュートの成功率において、他国のプレイヤーにひけをとらないプレイヤーは何名かいた。又ゴール下においても、現に相手と殆んど対等の成功率を何回か挙げ得ているではないか。即ち外国に匹敵する各地域別の成功率を挙げ得るシュート力には大きな差はなかったのである。ここにゴール下でシュートのチャンスを作る力と、その力に対する信頼感を持つ事が出来るようになれば、ゴール下地域における試投数比はより増大すると同時にそれによって長距離シュートを投げるプレイヤーは自ら限定されて、中長距離地域よりのシュートはより選択されたいいチャンスとなり、同時に各地域別の成功率の向上も期待出来るのである。このように考えると、日本の F. S 成功率不振の最大の原因は、シュート技術そのものの拙

劣さや、相手の防禦力にあったのではなく、シュートチャンスとその成功率の最低の保証となる攻撃方法及びその力の拙劣さにあったと言わざるを得ないのである。

この力に外国よりより優れる事によって、始めて外国に匹敵する F. S 成功率を挙げる道が開けるものと私は確信するのである。

即ち、以上の考え方ですべての外国チームに勝てると考えるのは、早計であろうが、この方向にのみ日本の勝利への道があるという事も確実なのである。

もし、以上の考え方で F. S 成功率が 5% 程度の差にまで接近する事に成功するならば、ゲームに勝つ方法は相当に考えられ、考えられるものの多くは練習によって獲得する可能性を多分にもつものであるが故に、そこに努力次第によっては日本の勝利への道が開けると私は言うのである。

③ 攻撃方法の差異による攻撃成功率は、チームにより、相当の差があるものと考えられるが、「第 7 表」及び「第 10 表」は一般に成功率の高い攻撃方法が何であるかを示しているものである。

即ち、以上の二表は相手の M. P より始まる攻撃及び O. R をとってからの攻撃が、FS 成功率において他の攻撃法より約 10% 以上も高率である事を示している。

“とって走って、シュートしてフォロー”が対等の条件においてのゲームで多くの場合最も良い攻撃方法になるのは、ここにその理由があるわけである。

しかし、RB の項に前述した如く、約 10 cm の身長差がある場合には、O. R をとってからの攻撃回数が相当にマイナスされる事を覚悟しなければならない。この有利な攻撃回数のマイナスを、どの程度相手の M. P から始まる攻撃回数のプラスによって補い得るか、ここに日本の国際ゲームに於ける成否の鍵があると考えなければならない。

④ シュートの時機による成功率の相違は、ゲームの実際について言えば、種々の点が指摘出来る事と思う。しかし、どのチームにとっても、或は個人にとっても言い得る事は“気合の入ったシュート”を

すると言う事である。

“気合の入った”とは種々の要素がうまく混合されて出来るシュートに対する態度であるがその中でも最も大きな部分を占めるのは、シュートのチャンスに対する見通しがあるという事である。

即ち、ボールを持ってから空いている事を発見してのシュートは多くは気合の入ったシュートとはならない。ボールを持つ瞬間に、次はシュートだと感じてのシュートは気合の入ったシュートとなるのである。“ファストチャンスにシュート”というシュートのやり方のねらいも、又一般にフリーオフENSにおけるよりは、シュートのチャンスが作られてあるオフENSの方が、シュートの入りのいいのはここにその原因があるわけである。

それ故に、シュートしてフォローするやり方で勝目の少ないチームであればある程、シュートのチャンスは作ってやらなければならないのである。いかに多くよりうまくシュートのチャンスが作られているかが、多くの場合、気合の入ったシュートの出来る比率を決定するものである。

### (3) 自由投成績の検討

自由投が与えられると言う事は、F. S 試投数減少の原因になるので、M. P と同じ性質と考えられるが、それ等によって得点を挙げる事が出来るという点から見れば、攻撃の成功とも考えられるものである。

又、これは F. S 成績の如く両チームの力の相対関係によってその成績が決定されるものとは違い、その試投数は、審判によって得られるものであり、又同じ回数 F. T の機会が与られたとしても、それ等が1スローか、2スローであるかによって、或は同じ数、スローに失敗したとしても、それ等が第1投目か、第2投目であったかによって、いくらか成績の相違が出来るという偶然性と、特異性があるので、F. S 成績とは別にして検討しなければならない。

ゲームの成績は、すべて得点を挙げるために失った基攻数との関係

において検討しなければならないが、F. T においては、その考え方には次の三つがある。

- i F. T 最後のスローが成功したために失った基攻数、(日本 11, 外国 12)
- ii F. T 最後のスロー失敗の R. B で相手にとられたものを含む (日本 16, 外国 16)
- iii F. T が与えられた回数、(試投数ではない) (日本 18, 外国 18)

i の考え方は、F. T 成績そのもののみをとり上げたものであり、iii は F. S 成績と異質なものはすべて F. T 成績と考える考え方であり、ii は、そこにフォロー力と言う異質の成績が若干加味されるが、基攻数を失った原因が F. T にあったという実際に即した考え方である。

私はこの第二の考え方によってその成績を検討する事にする。

(I) 基本攻撃回数の検討

ファウルされた回数と試投数との関係は、日本においては一般には「第 14 表」の如くである。

第 14 表 ファウル数と試投数との関係

○F. T のないファウル 27% { バスケットカウント 34% フロントコート { 攻撃中 17% { 防禦中 49%	}	○F. T のあるファウル 73% { 1 スロー 54% 2 スロー 46%
------------------------------------------------------------------------	---	-----------------------------------------------

(概算としては、ファウルされた回数と試投数はほぼ同じが普通)

第 14 表の関係は、ゲームのやり方やプレーヤーの相違によって個々のゲームについて見れば、相当違ったものになる事は勿論である。中でもオールコートプレスディフェンスは、F. T のないファウルが背の大きいチームに対しては、2 スローのファウルのしめる比率が増大するものである。

第 14 表を参考にして、日本と外国のファウルに対する両チームの試投数を検討して見よう。

	外 国	日 本
F. T のあるファウル	$33 \times 73\% = 24.09 \div 24$	$25 \times 73\% = 18.25 \div 18$
F. T のないファウル	$33 \times 27\% = 8.91 \div 9$	$25 \times 27\% = 6.75 \div 7$
ワンスローの試投数	$24 \times 54\% = 12.96 \div 13$	$18 \times 54\% = 9.72 \div 10$
ツウスローの試投数	$(24 \times 46\%) \times 2 = (22.08) \div 22$	$(18 \times 46\%) \times 2 = 16.56 \div 16$
実際との相違	$27 - (13 + 22) = -8$	$24 - (10 + 16) = -2$

以上の検討式から推察出来る事は、

① 外国チームの試投数差-8 は、日本の防禦のやり方及び、約 10 cm の身長差があった事から、そのファウルには F. T のないファウルが非常に多く又、F. T のあるファウルでは、2 スローが多かったのではないかと想像される。

即ち、

$$\begin{aligned}
 33 \times (73\% - A\%) &= \text{FT のあるファウル} = X < 24 \\
 (X < 24) \times (54\% - B\%) &= 1 \text{ スローの試投数} = Y < 13 \\
 (X < 24) \times (46\% + B\%) \times 2 &= 2 \text{ スローの試投数} = Z \leq 22 \\
 Y + Z &= 27
 \end{aligned}$$

という関係から実際は

$$\begin{aligned}
 Y &= 13 - 4 = 9 \\
 Z &= \left( \frac{22}{2} - 2 \right) \times 2 = 18
 \end{aligned}$$

であったらうと考えられるのである。

即ち、外国は 18 回 F. T が与えられ、その中の 50% が 2 スローだっただらうという事である。

これと同じ考え方から日本の 2 回の試投数差は、外国チームは大きかったが故に、もし背が同等ならば、当然 2 スローのファウルになる様なプレーが、ファウルにならなかったという様なケースが、いくつ

かあったらろうと考えられるので

$$18 \times (46\% - A\%) \times 2 = 2 \text{ スローの試投数} = Y' < 16$$

$$18 \times (54\% + A\%) = 1 \text{ スローの試投数} = Z' > 10$$

$$Y' + Z' = 24$$

という関係が実状であったと考えられ、24回の試投数は

$$(8-2) \times 2 = 12 \quad 2 \text{ スローの試投数}$$

$$(10+2) \times 1 = 12 \quad 1 \text{ スローの試投数}$$

であったらろうと考えられるのである。

⑦ 同じ 18 回の FT が与えられながら、その試投数に 3 回の差が出来たと言う事は、ここにも身長差の不利があった事を示しているものである。(この研究は、ローマオリンピック当時の国際ルールに依る現在では、1 スローはない)。

## (II) 自由投有効点の検討

F. T は M. P と攻撃の成功と両面の性質を持っておるので、FT を与えられた事が、そのチームにとってどの程度、得であったのか、損であったのかを示すのが、FT 有効点である。

それ故に、FT 有効点は多くの場合はプラスであるが、マイナスになる事もありうるわけである。

① F. T で失った基攻数  $\times$  基攻率  $\times 2 =$  F. T で失った回数での F. S 得点

$$\begin{cases} \text{日本} & 16 & \times 32.6\% \times 2 = 10.528 \\ \text{外国} & 16 & \times 45.7\% \times 2 = 14.624 \end{cases}$$

② FT であげ得た得点 - FT 回数であげ得る F. S 得点 = FT 有効点

$$\begin{cases} \text{日本} & 15 & -10.528 & = 4.472 \\ \text{外国} & 18 & -14.624 & = 3.376 \end{cases}$$

(日本の大学リーグ)

③ 日本 F. T 有効点 - 外国 F. T 有効点 = F. T 成績差

$$4.472 \quad -3.376 \quad = 1.096 \div 1$$

以上の検討式から言える事は

④ 両チーム FT 有効点が共にプラスであったのは、FT が与えら

れたという事は、共により多く得点をあげ得る原因になったという事を意味するものである。

⑨ 試投数において3回、成功率 4.1%の劣勢はマイナス3点に相当するものであり乍ら、なお、日本がその有効点において優れていたのは、基攻率において劣っていたからである。即ち FT は共にプラスのプレーとなったのではあるが、その量において、日本がより大であったという事である。

⑩ この事はもし両チームに与えられる F. T 回数が同じであるならば、その回数が少なくて同数であるよりは、多くて同数であった方が日本に有利になるという事を意味するものである。

⑪ F. T 成績において、日本がプラス1点であったが故に、FT がなければ、26 点差で終るべきゲームが、実際は 25 点差で終了したのである。

$$(99 \times 45.7\% \times 2) - (98 \times 32.9\% \times 2) = 26 \quad \text{F. T のない得点差}$$
$$\{(38 \times 2) - (27 \times 2)\} + (18 - 15) = 25 \quad \text{実際の得点差}$$

⑫ F. T 有効点に於いて優れていてもその主なる原因が、基攻率の劣勢にあったのでは勝因とはなり得ない。これが勝因になるためには、F. T の成績そのものがよい所に基因するものでなければならない。

F. T の成績そのものとは、与えられた FT において、2 スローの数、成功率、第一投を失敗しない事、失敗したスローの R. B を獲得する事等において相手より、いい成績であるという事である。

⑬ F. T 成功率が 62.5% と 66.6% であったのは両チーム共にいい成功率であったとは言えない。共に国際試合における心理的な圧迫感がこの様な低下の原因になったものと考えられるが、特に日本のゲーム毎の成績が 51.8, 50%, 59.4%, 76.6%, 73.8%, 81.8%, 27.2% と変わっている所から見ると、ゲームの雰囲気になれるまでの不成績が大きく影響していると言えるのである。

以上で対戦記録の検討は終るが、これまでに検討して得られた事は、その対戦記録が実在のものではなかった事、そこに相当多くの推察が行われた事、及び得点差が 20 点以上もあったゲームなので、勝チー

ムには、スコアに現われないプラスAの力があったのだろうという理由で、そのまま信用するには若干の危険性がある事は否定出来ない。

しかし、数字は正直であるという事から、個人の主観だけでは感じ得なかったいくつかの事が発見出来たし、又感じられた現象の真の原因がどこにあったかをも知る事が出来たのである。

次に残された私の仕事はと言えば、実際の体験者と共にもう一度これらの事を検討し、より正しい実状を把握するという事であり、次いで、それらを基礎にして対策をあらゆる面から研究し、たてられた対策が、練習によって獲得されるものであるか否かを検討する事であろう。

後は、傍目もふらずに倦む事なく対策の具現に邁進するのみである。